

## あなめでた

あなめでた千手観音七体のそろって歌ふときぞ輝く

深海鮫鯨

ももすもも百韻連ねしゆかりとて鶴の歩みのうるはしきかな

真奈

かうかうと頸打ち交わし丹頂の雌雄は舞ひ舞ふ北の原野に

かわせみ

丹頂の声響きけり釧路なる湿原の上の朝焼けの雲

弁慶

わが脳は透かし彫りなり松があり鶴が飛びをる欄間の雲間

深海鮫鯨

わが記憶夜空にありき創世の光を浴びて今も尽きざる

丹仙

北の辺の凍てつく街は度ごとに遠い記憶をたどる門口

蘇生

北の辺の冬コオロギの眼に映えて雪景色あり前世のデジャヴユ

深海鮫鯨

氷河期のイイジマルリボシヤンマなほ釧路に生きて湿原に翔ぶ

真奈

温暖化永久凍土とけ出だしユカギリマンモス現るる危機

れん

乗客も思わず笑う駅員の声高らかや大楽毛

弁慶

惚くるも楽しからずや老父と手をとりにて往く大步危、小歩危

かわせみ

逝きて早や思うことごと多かりき父に手向けんせめて紅葉を

蘇生

霜の朝の梢に百舌が鳴いてをり楓紅葉の葉を落としつつ

たまこ

紅楓の紅葉に隣る銀杏の黄葉見たりわれもまた白髪染めむ紫か茶か

深海鮫鯨

姫沙羅の黄葉ゆかしき谷の奥水湧く音のこだま微かに

弁慶

水音の静かに聞こゆ湖に白鳥旋回しました舞いもどる

くりおね

釣り人の絶えし堤に佇めば潮の音は冷え冷えとして

蘇生

飽きもせでテトラポッドに当る潮ヨシコラセともソウデンガナとも 海月

面白いこと言いますね海月さん あれはテトラがいやじゃいやじゃと 蘇生

飽きもせで本日釣りたる十字の句百を超えなば投句せむとす 深海鮫鯨

三分の集中力でひねりだす忙しい朝さて投稿す くりおね

朝なさなまずパソコンのキィを打つボケを防ぐに有効なりや 蘇生

ボケ来たる脳に咲く花歌一首霜降る冬も春のごとくに 深海鮫鯨

卓上に天鷲絨のごとき薔薇ありて愛に滾りし血潮を思ふ ぎを

うふふふとくすすのあいだ冬薔薇珈琲の香にかすかにけもの 海月

ひたすらに冬薔薇咲かす馬鹿でして天鷲絨の深き襷をまとへず 真奈

赤と黒回すソレルのルーレット日向ぼこにはめくるめくなり 蘇生

赤と黒ジュリアンソレルの面影の鶴田浩二の暗いあのうた 弁慶

鶴頭は赤に黒なる丹頂の清姿舞ひをる田二浩き空 深海鮫鯨

赤電車灯りのともる最後尾雪ふる夜明け遠ざかりゆく くりおね

夜行列車の窓に貼りつきどこまでも憑きて離れぬ私の顔 かわせみ

ていんていんと遮断機下りて乗れぬのだ おおゾーバの！雪降る列車に 海月

いんいん 殷殷と星を散らして鳴る鐘か天より降るシベリアの風 深海鮫鯨

ゴビ近き黄河のほとりの殷墟にも白き雪降る夕間暮れかな 弁慶

有り得ない指値と知りつ買ひ漁る株屋はけだし陰虚にも似て 蘇生

右左いづれの指も細りしかひとり指輪を空まはりさす ぎを

この空に遊びをせんとや生れしをお願いする還してくれたまへ 海月

仕手こそはみずからなすを言ふなめり乳首嘗めて世遊すさび始む

深海鮫鯨

故もなく掠めとるとは不浄なりしたり顔なる金の亡者よ

蘇生

知るほどになにがよいのかわるいのかわからなくなる人というもの

くりおね

君知るや南の国空青くゆたかなる森花溢るるを

真奈

君知るや日向ぼこりの窓の辺に今も小さき大文字の花

蘇生

君知るや右京一条戻り橋雪降る夜に佇む我を

弁慶

雪降らば来ぬと君は言ひつれど橋のたもとに松あれば待つ

深海鮫鯨

冬桜待っているなら駆けつける仕事を終えて一目散に

くりおね

恋しくば五尺の雪を掻き分けて冬桜咲く雪の野に来よ

弁慶

こともなき師走の日々はつごもりへいよよ迎へむ父亡き年を

蘇生

師走には主なき池にも声あらむふくらむ梅の蕾ぞ聞こゆ

深海鮫鯨

大つごもり真近きけふの愛鷹の尾根の白雪うすらぎにけり

れん

大富士に寄り添う妻の愛鷹は雪も積もらず冬を越すかな

弁慶

雪肌の富士を染めたる夕茜 君の額に酒の功あり

深海鮫鯨

西空の澄める朝は冬富士の彼方に頭ちぬ未来のごとくに

ぎを

赤々と沈む夕日に冬の富士白雪赤く染まり行くかな

弁慶

夕日追ふ影は老あゆく人ならむ朱に染まりゆく天に降る霜

深海鮫鯨

夕映えの海に沿いゆく江ノ電の上り下りの影が交差す

蘇生

凧鉄路裸の大将往くぐんぐんと下駄音高く

海月

市振の浜沿ひ走る日本海波濤を砕く雪の烈しき

真奈

吹き荒れよ夜の底なる雪女 声果てたらば唇くちに朝焼け 深海鮫鯨

親知らず子知らず雪の細き道大波よせる越中の国 弁慶

列島は師走の過去に例のなき雪に襲われ不気味なりけり 蘇生

雪に舞う凍蝶の夢醒むるとき朝日に匂ひ庭に蠟梅 深海鮫鯨

関東に今夜は雨と予報士は待ち人来たるところとく宣う 蘇生

百代の過客なるかや眼前を待ち人来り流れ行きたり 海月

三嶋曆携へ芭蕉は陸奥へ今宵は姉齒の松のあたりか 弁慶

曆買ひ詩を祭らむと思へども李白百代読みて過ごせり 深海鮫鯨

ユニークな七百五十六日の曆に暫し二年の計を 蘇生

こんな日は雪女郎とて淋しかる裏木戸開いたかへのへのもへや 海月

舞い狂い逆巻く雪を通り抜け後る髪曳く冷たき女 くりおね

にこやかな王昭君のかんばせに良く似た今夜の雪女かな 弁慶

この冬の大雪襲う列島の異国にあるやわが住む街は 蘇生

木枯らしの吹き過ぐ街に灯点ればビルごとクリスマス・ツリーかな 真奈

木枯しの森に雪降る朝まだき藁科川の岸に釣り人 弁慶

鎌倉や江戸を定めし昔人そのすぐるを今年の雪に 蘇生

箱根路や鎌倉往還古えの道しるべあり杉の木の下 弁慶

北鎌倉学寮で鳥もつ鍋雪混じり風黒き山門 海月

学園の银杏並木は葉を落とし影黒くして祈ることくに れん

学園へいたる坂にも男女ありゆるやかなるは女坂とか 蘇生

八千公の左手かなた道玄坂恋文横丁ありし辺りよ

弁慶

小さな道玄坂のかの店のパジリコパスタ味のよろしく

れん

道玄坂裏の名曲喫茶店恋と闘い交叉せし時代とき

茉莉花

ライオンてふ迷宮回路足穂めて一千一秒セコンドやまず

海月

ビヤ・ホールライオン目指し足早に友と急ぎし銀座五丁目

弁慶

ライオンの壁に描かるモザイクにビールを造る歓喜あふるる

蘇生

新宿のモザイク通りの年末は回遊魚族が赤き眼をして

真奈

釣り人に赤き夕陽の照る眼あり海の向こふの前世が映る

深海鮫鯨

釣り人の絶えて久しき狩野川に冬の靄立つ極月の朝

弁慶

迷ひしはいづくの淵か懐かしむ年の瀬といふ浅きに立ちて

ぎを

淵深き河童も住むと人の言う遠野の里も雪に埋もれて

弁慶

初富士の写真アップを楽しみにそれでは皆様よいお年越しを

雛菊

祭るにも無きに等しき六千の漢詩に注ぐ今宵のワイン

深海鮫鯨

折々の思い認む六千の漢詩言祝ぐ杯をあげなむ

蘇生

ひかりなき闇をぬければ明日のあり二千六年とびらひらかむ

れん

新しき年巡りきて祈るらんいずこにありても良き年なれと

茉莉花

東雲に陽なる兆し未だなく心静かに初明り待つ

蘇生

二日にてもうやることのありません猫髭なんぞつまんでみよう

海月

若者が己をかけて駆ける今二日の雨の箱根駅伝

蘇生

たすきこそ若人つなぐ具体なり国を愁ふは老残の愚痴

深海鮫鯨

日の丸のやたらと目立つ銀座通り歩き顔して荷風散人

真奈

荷風とは蓮の花ふく風ならむ池のほとりの世を捨てし人

弁慶

桃李和歌連作百首歌集

第七〇〇一首より七一〇〇首迄

平成一七年一二月七日より平成一八年一月四日